

I-135 立体骨組構造物の力学的相似条件について

熊本大学 工学部 正員 福井武弘

同 上 正員 ○ 三池亮次

大成建設 正員 右田泰弘

1. 要旨。骨組構造解析のように数式による現象表示が比較的容易の場合には、弾性基礎式そのものの無次元化によって、より適正な無次元積を誘導することができる。ここでは、立体骨組構造の弾性基礎式をマトリクスで表示し、その力学的性状を支配する無次元積の誘導を試み、模型実験における相似則および骨組構造の比較設計上の諸問題について検討したものである。最適設計、構造物の標準化の問題にも、この相似解析は不欠欠の手法と考える。

2. 立体骨組構造解析の基礎式のマトリクス表示。中間荷重が作用する場合の i_j 部材の i 点における断面力は、 \bar{U}_{ji} 、 \bar{U}_{jj} と i_j 部材の i または j 点における変位とするとき 次式

$$\bar{X}_{iji} = \bar{K}_{iji} \cdot \bar{U}_{ji} + \bar{K}_{ijj} \cdot \bar{U}_{jj} + \bar{C}_{iji} \quad (1)$$

である。ここに \bar{C}_{iji} は $\bar{U}_{ji} = \bar{U}_{jj} = 0$ 、すなわち i_j 部材の部材端を固定したときの中間荷重に基づく i 点における断面力。 \bar{K}_{iji} 、 \bar{K}_{ijj} は剛性マトリクスである。バーは部材座標軸を意味する。

変位、断面力の正の方向を次のようく定める。

- ① 基準座標軸は右手系 (x, y, z) 軸で表わす。
- ② i_j 部材 ($j > i$) の \bar{Y}_j 方向を y 軸の正の方向とする右手座標系で、 i_j 部材座標軸を表わす。

j_i 部材については、 i_j 部材軸と逆方向の座標軸、したがって左手系で、部材座標軸を表わす。

③ 正の断面において正の方向、または負の断面において負の方向の部材断面力を正の断面力とする。曲げモーメントの正の方向は、右まわりねじの進む方向とする。

立体骨組構造において、部材座標軸に対する変位および断面力のベクトルの成分は、添字 (t) で転置を意味するものとして、

$$\bar{U}_{iji}^{(t)} = [\bar{U}, \bar{V}, \bar{W}, \bar{\Phi}_3, \bar{\Phi}_4, \bar{\Phi}_5]_{iji}, \quad \bar{X}_{iji}^{(t)} = [\bar{X}, \bar{Y}, \bar{Z}, \bar{M}_3, \bar{M}_4, \bar{M}_5]_{iji}$$

である。ここに、 $\bar{U}, \bar{V}, \bar{W}, \bar{X}, \bar{Y}, \bar{Z}$ は、各軸方向の変位および断面力、 $\bar{\Phi}_3, \bar{\Phi}_4, \bar{\Phi}_5, \bar{M}_3, \bar{M}_4, \bar{M}_5$ は各軸のまわりの回転変位およびモーメント、添字 i_j は、 i_j 部材の i 点における値を意味する。また、剛性マトリクスを

$$\bar{K}_{iji} = \begin{bmatrix} -K_{ii} & 0 & K_{26} \\ -K_{22} & -K_{33} & K_{35} \\ 0 & -K_{44} & 0 \\ -K_{53} & -K_{55}^i & -K_{66}^i \end{bmatrix}_{ij}, \quad \bar{K}_{ijj} = \begin{bmatrix} K_{ii} & 0 & K_{26} \\ K_{22} & K_{33} & K_{35} \\ 0 & K_{44} & 0 \\ K_{53} & -K_{55}^j & -K_{66}^j \end{bmatrix}_{ij}$$

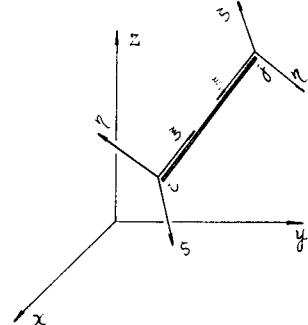


図-1 立体骨組構造の基準および
部材座標軸。

とすれば、せん断力による部材の変形を考慮するとき、剛性マトリクスの要素 K は、添字 ij を省略して、

$$K_{11} = \frac{EA}{l}$$

$$K_{22} = \frac{12EI_3}{(1+12\varepsilon_3)l^3}$$

$$K_{33} = \frac{12EI_1}{(1+12\varepsilon_3)l^3}$$

$$K_{44} = \frac{kGI_5}{l}$$

$$K_{55}^i = \frac{4EI_1(1+3\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)l}$$

$$K_{66}^i = \frac{4EI_3(1+3\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)l}$$

$$K_{55}^j = \frac{2EI_1(1-6\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)l}$$

$$K_{66}^j = \frac{2EI_3(1-6\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)l}$$

である。

$$\varepsilon_1 = Z(1+\nu)\frac{1}{r_1^2}, \quad \varepsilon_3 = Z(1+\nu)\frac{1}{r_3^2}$$

である。 l , A , E , G , I , ν は部材の長さ、断面積、弾性係数、せん断弾性係数、断面2次モーメント、ポアソン比であり、 r は部材の細長比である。添字 i , j は i 軸ある j 軸のまわりの値を意味する。なお、中間荷重による固定端断面力の成分を次のようとする。

$$\bar{C}_{ij}^{(t)} = [\bar{C}_x, \bar{C}_y, \bar{C}_z, \bar{C}_{M_3}, \bar{C}_{M_1}, \bar{C}_{M_3}]_{iji}$$

3. 無次元積の誘導 (1)式の第1行より第3行に $\frac{1}{E_0 A_0}$ を、第4行より第6行に $\frac{1}{E_0 A_0 l_0}$ を乘じ無次元化する。ここに、 E_0 , A_0 , l_0 の添字 0 は、基準部材における値を意味するものとする。また

$$k_{Eij} = \frac{E_{ij}}{E_0}, \quad k_{Aij} = \frac{A_{ij}}{A_0}, \quad k_{Lij} = \frac{l_{ij}}{l_0}, \quad r_{ij}^2 = \frac{A_{ij}l_{ij}^2}{I_{ij}} = \frac{1}{\frac{1}{r_{ij}^2} + \frac{1}{r_{ij}^2}}$$

とすれば、剛性マトリクスの要素は、次のとおりとなる。

$$\frac{K_{11}}{E_0 A_0} = k_E k_A \frac{1}{k_L} \frac{1}{l_0}$$

$$\frac{K_{55}^i}{E_0 A_0 l_0} = k_E k_A k_L K_{55}^{i0}, \quad K_{55}^{i0} = \frac{4(1+3\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)r_1^2}$$

$$\frac{K_{22}}{E_0 A_0} = k_E k_A \frac{1}{k_L} K_{22}^0 \frac{1}{l_0}, \quad K_{22}^0 = \frac{12}{(1+12\varepsilon_3)r_3^2}, \quad \frac{K_{66}^i}{E_0 A_0 l_0} = k_E k_A k_L K_{66}^{i0}, \quad K_{66}^{i0} = \frac{4(1+3\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)r_3^2}$$

$$\frac{K_{33}}{E_0 A_0} = k_E k_A \frac{1}{k_L} K_{33}^0 \frac{1}{l_0}, \quad K_{33}^0 = \frac{12}{(1+12\varepsilon_3)r_1^2}, \quad \frac{K_{55}^j}{E_0 A_0 l_0} = k_E k_A k_L K_{55}^{j0}, \quad K_{55}^{j0} = \frac{2(1-6\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)r_1^2}$$

$$\frac{K_{44}}{E_0 A_0 l_0} = k_E k_A k_L K_{44}^0, \quad K_{44}^0 = \frac{k_{ij}}{Z(1+\nu)r_3^2}, \quad \frac{K_{66}^j}{E_0 A_0 l_0} = k_E k_A k_L K_{66}^{j0}, \quad K_{66}^{j0} = \frac{2(1-6\varepsilon_3)}{(1+12\varepsilon_3)r_3^2}$$

$$\frac{K_{26}}{E_0 A_0} = -\frac{1}{2} k_E k_A K_{22}^0, \quad \frac{K_{62}}{E_0 A_0 l_0} = \frac{1}{2} k_E k_A K_{22}^0 \frac{1}{l_0}, \quad \frac{K_{35}}{E_0 A_0} = -\frac{1}{2} k_E k_A K_{33}^0, \quad \frac{K_{53}}{E_0 A_0 l_0} = -\frac{1}{2} k_E k_A K_{33}^0 \frac{1}{l_0}$$

また、 P_0 を外力の基準値とすれば、次の無次元断面力を得る。

$$\frac{\bar{X}}{E_0 A_0} = \frac{P_0}{E_0 A_0} \cdot \frac{\bar{X}}{P_0}, \quad \bar{X}^0 = \frac{\bar{X}}{P_0}, \quad \frac{\bar{M}_3}{E_0 A_0 l_0} = \frac{P_0}{E_0 A_0} \frac{\bar{M}_3}{P_0 l_0}, \quad \bar{M}_3^0 = \frac{\bar{M}_3}{P_0 l_0}, \quad \dots$$

同様に、固定端断面力の無次元積として、

$$\frac{\bar{C}_x}{E_0 A_0} = \frac{P_0}{E_0 A_0} \frac{\bar{C}_x}{P_0}, \quad \bar{C}_x^0 = \frac{\bar{C}_x}{P_0}, \quad \frac{\bar{C}_{M_3}}{E_0 A_0 l_0} = \frac{P_0}{E_0 A_0} \frac{\bar{C}_{M_3}}{P_0 l_0}, \quad \bar{C}_{M_3}^0 = \frac{\bar{C}_{M_3}}{P_0 l_0}, \quad \dots$$

上記の無次元断面力を要素とする、無次元ベクトルを

$$\bar{X}_{ij}^{(t)} = [\bar{X}^0, \bar{Y}^0, \bar{Z}^0, \bar{M}_3^0, \bar{M}_1^0, \bar{M}_3^0]_{iji}, \quad \bar{C}_{ij}^{(t)} = [\bar{C}_x^0, \bar{C}_y^0, \bar{C}_z^0, \bar{C}_{M_3}^0, \bar{C}_{M_1}^0, \bar{C}_{M_3}^0]_{iji}$$

とし、変位の無次元量を

$$\bar{u}_{ij}^{(t)} = \left[\frac{u}{l_0}, \frac{v}{l_0}, \frac{w}{l_0}, \phi_x, \phi_y, \phi_z \right]_{ij}^t$$

とすれば、剛性マトリクスの無次元量

$$\bar{K}_{ij}^{(t)} = k_{Eij} k_{Aij} \begin{bmatrix} \frac{1}{k_L} & 0 & -\frac{1}{2} K_{zz} \\ -\frac{1}{k_L} K_{zz} & 0 & \frac{1}{2} K_{zz} \\ 0 & -\frac{1}{k_L} K_{33} & \frac{1}{2} K_{33} \\ 0 & -k_L K_{44} & 0 \\ \frac{1}{2} K_{33} & -k_L K_{55} & 0 \\ -\frac{1}{2} K_{zz} & 0 & -k_L K_{66} \end{bmatrix}_{ij}^t, \quad \bar{K}_{jj}^{(t)} = k_{Eij} k_{Aij} \begin{bmatrix} \frac{1}{k_L} & 0 & -\frac{1}{2} K_{zz} \\ \frac{1}{k_L} K_{zz} & 0 & \frac{1}{2} K_{zz} \\ 0 & \frac{1}{k_L} K_{33} & 0 \\ 0 & k_L K_{44} & 0 \\ -\frac{1}{2} K_{33} & -k_L K_{55} & 0 \\ \frac{1}{2} K_{zz} & 0 & -k_L K_{66} \end{bmatrix}_{ij}^t$$

に対して、次式が成立するであろう。

$$\left(\frac{P_0}{E \cdot A_0}\right) \bar{X}_{ij}^{(t)} = \bar{K}_{ij}^{(t)} \bar{u}_{ij}^{(t)} + \bar{K}_{ijj}^{(t)} \bar{u}_{ijj}^{(t)} + \left(\frac{P_0}{E \cdot A_0}\right) \bar{C}_{ij}^{(t)} \quad (2)$$

また、 i 節点における外力および変位の無次元ベクトルを

$$\bar{X}_i^{(t)} = \left[\frac{X}{P_0}, \frac{Y}{P_0}, \frac{Z}{P_0}, \frac{M_x}{P_0 l_0}, \frac{M_y}{P_0 l_0}, \frac{M_z}{P_0 l_0} \right]_i^t, \quad \bar{u}_i^{(t)} = \left[\frac{u}{l_0}, \frac{v}{l_0}, \frac{w}{l_0}, \phi_x, \phi_y, \phi_z \right]_i^t$$

部材軸の基準部材に対する方向余弦マトリクスを T_{ij} とすれば、 i 節点における平衡方程式は、

$$\sum_j T_{ij}^{(t)} \bar{X}_{ij}^{(t)} + X_i = 0 \quad \text{あるいは, } \sum_j T_{ij}^{(t)} \left(\frac{P_0}{E \cdot A_0} \right) \bar{X}_{ij}^{(t)} + \left(\frac{P_0}{E \cdot A_0} \right) \bar{X}_i^{(t)} = 0 \quad (3)$$

であり、

$$\bar{u}_{ij}^{(t)} = T_{ij} \bar{u}_i^{(t)}, \quad \bar{u}_{ijj}^{(t)} = T_{ijj} \bar{u}_j^{(t)} \quad (4)$$

であるから、(2), (4) 式'を(3)式'に代入すれば、

$$\left(\sum_j T_{ij}^{(t)} \bar{K}_{ij}^{(t)} T_{ij} \right) \bar{u}_i^{(t)} + \sum_j \left[\left(T_{ij}^{(t)} \bar{K}_{ij}^{(t)} T_{ij} \right) \bar{u}_j^{(t)} \right] = - \frac{P_0}{E \cdot A_0} (C_i + X_i) = \frac{P_0}{E \cdot A_0} P_i \quad (5)$$

を得る。ここに

$$C_i = \sum_j T_{ij}^{(t)} \bar{C}_{ij}^{(t)}, \quad P_i^{(t)} = \left[P_1^{(t)}, P_2^{(t)}, \dots, P_N^{(t)} \right], \quad \bar{u}^{(t)} = \left[\bar{u}_1^{(t)}, \bar{u}_2^{(t)}, \dots, \bar{u}_N^{(t)} \right]$$

とすれば、基準座標軸に対する剛性マトリクスの無次元積を K^o とするとき、

$$K^o \bar{u} = \frac{P_0}{E \cdot A_0} P^o \quad \text{あるいは, } \frac{E \cdot A_0}{P_0} \bar{u} = K^{o-1} P^o \quad (6)$$

(6)式は、無次元積 $\bar{K}_{ij}^{(t)}$, $\bar{K}_{ijj}^{(t)}$ によって構成される無次元積 K^{o-1} と荷重の無次元積 P^o の積により、

変位の無次元積 $\frac{E \cdot A_0}{P_0} \frac{u}{l_0}$, 回転変位の無次元積 $\frac{E \cdot A_0}{P_0} \phi_x, \dots$

の誘導されることを示す。(6)式より得る $\bar{u}_i^{(t)}$, $\bar{u}_j^{(t)}$ を(4)式'に、(4)式をさらに(2)式'に代入すれば、

$$\bar{X}_{ij}^{(t)} = \left\{ \bar{K}_{ij}^{(t)} T_{ij} (K^{o-1})_i + \bar{K}_{ijj}^{(t)} T_{ijj} (K^{o-1})_j \right\} P^o + \bar{C}_{ij}^{(t)} \quad (7)$$

であるから、断面力の無次元積は、既述の無次元積で十分である。

軸力 X と曲げモーメント M_η を受けける部材断面の線応力 $\sigma_{xM\eta}$ は、 η 軸よりの線距離を Z_η とすととき

$$\sigma_{xM\eta} = \frac{X}{A} \pm \frac{M_\eta}{I_\eta} Z_\eta$$

であるから、両辺に A_0/P_0 を乗じて、応力の無次元積を誘導すれば、

$$\begin{aligned}\sigma_{x\eta}^{\circ} &= \frac{\sigma_{x\eta} A_0}{P_0} = \frac{A_0}{A} \frac{X}{P_0} \pm \frac{A_0}{A} \frac{l_0}{l} \frac{Al^2}{I_\eta} \frac{M_\eta}{P_0 l} \frac{z_\eta}{l} \\ &= \frac{1}{K_A} \frac{X}{P_0} \pm \frac{1}{K_A} \frac{1}{K_L} \cdot r_\eta^2 \cdot z_\eta^{\circ} \cdot \bar{M}_\eta^{\circ}\end{aligned}\quad (8)$$

4. 相似解析 立体骨組構造の力学的性状に関する各種の無次元積を次のようにとりまとめる。

(a) 形状に関するもの — $K_A, K_L, K_{ij}, T_{ij}, Z_\eta^{\circ}, Z_S^{\circ}, r_\eta, r_{05}, K_I$ —

なお、細長比 $r^2 = \frac{Al^2}{I} = \frac{A}{A_0} \frac{l^2}{l_0^2} \frac{I_0}{I} \cdot \frac{A_0 l_0^2}{I_0} = (K_A K_L / K_I) r_0^2$ — (9)

であるから、 r^2 の代わりに r_0^2, K_I が、形状を表わす無次元積として追加されることになる。

(b) 材料に関するもの — ν, K_E —

(c) 荷重に関するもの — $P^{\circ}, M^{\circ}, \bar{C}_x^{\circ}, \bar{C}_{m5}^{\circ}, \dots$ — \bar{C}° は、前記の無次元積で表わされる。

二つのシステム P, m の形状、材料、荷重に関する上記の無次元積が等しいとき、両者の形状、材料、載荷形式は相似であり、次の変形の相似則が成立するであろう。

(a) 変位の相似則

$$\left(\frac{E \cdot A_0}{P_0} \frac{u}{l_0} \right)_p = \left(\frac{E \cdot A_0}{P_0} \frac{u}{l_0} \right)_m \dots, \quad \left(\frac{E \cdot A_0}{P_0} \phi_x \right)_p = \left(\frac{E \cdot A_0}{P_0} \phi_x \right)_m \dots, \quad (10)$$

(b) 断面力の相似則

$$\left(\frac{X}{P_0} \right)_p = \left(\frac{X}{P_0} \right)_m \dots, \quad \left(\frac{M}{P_0 l_0} \right)_p = \left(\frac{M}{P_0 l_0} \right)_m \dots, \quad (11)$$

(c) 応力、ひずみの相似則

$$\left(\frac{\sigma A_0}{P_0} \right)_p = \left(\frac{\sigma A_0}{P_0} \right)_m, \quad \left(\frac{e E_0 A_0}{P_0} \right)_p = \left(\frac{e E_0 A_0}{P_0} \right)_m \quad (12)$$

(1) ひずみ模型、立体骨組構造の模型実験を行う場合、通常、長さの相似は満足できても、实物と相似の断面形状を作成することが困難であろう。このような場合、断面形状については擬似相似のひずみ模型を作る必要がある。さて、長さと断面積については完全相似で、その縮尺が、 K_A, K_L であるとする。少くとも、实物と模型の部材細長比が等しくならなければならぬ条件より、

$$\left(\frac{A_0 l_0^2}{I_0} \right)_p = \left(\frac{A_0 l_0^2}{I_0} \right)_m, \quad \therefore K_A \cdot K_L^2 = K_I = \frac{I_p}{I_m}, \quad K_A = \frac{A_p}{A_m} \quad (13)$$

平面骨組構造で、模型の断面が、縦 h 、横 b の矩形であれば

$$I_m = \frac{bh^3}{12} = \frac{Am h^2}{12} \quad \therefore h = \sqrt{\frac{12 I_p}{K_I \cdot A_m}}, \quad b = \frac{A_m}{h} \quad (14)$$

(2) 比較設計 汎荷重の影響の小さい大型骨組構造において、はりの単位体積重量を w とすれば $P_0 \propto w \cdot A_0 l_0$ であるから、これを (12) 式に代入すれば、次式を得る。完全相似で、スケールが n 倍となれば、応力は n 倍となる。 $(\sigma/w_0 l_0)_I = (\sigma/w_0 l_0)_{II}$

本研究を行うにあたり、熊大工学部吉村虎蔵教授から承認を受けたことを記し、謝意を表す。